観光地における公共空間
- とちぎの奥庭 -

CY12047　森澤昌典
指導教員　前田英寿

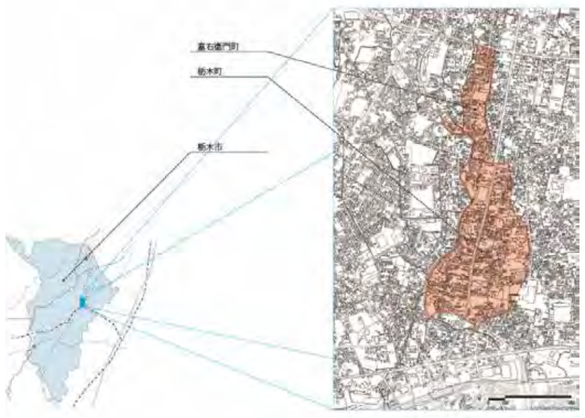
コンセプト

今日の地方都市は観光のためにハード整備に注力するが、それは地域性を損じる事もある。観光地化により、街に埋伏した資産を発掘、住民に還元し、人の温もりが街中に飛散する源泉を設計する。

「蔵の街　とちぎ」は、1617 年の江戸幕府開祖徳川家康の霊廟を日光山へ建立するに伴う江戸からの建設物資等の荷揚げ地として、1646 年に始まる京都朝廷から毎年派遣される例幣使の通る街道の宿場として位置づけられ、北関東一の商都に発展した。廃藩置県まで画一した支配体制が敷かれなかった背景もあり、現在でも住民の街づくりへの関心は高く、行政の一方的な政策に反感を抱く住民も多い。このようなとちぎの住民が醸し出す雰囲気に惹かれ、全国各地からとちぎの蔵で商いをしたいという人が訪ねてくる。しかし、個人所有の見世蔵は受け入れ体制が整っておらず、商いをしたいと訪ねても話が進展しない事がある。

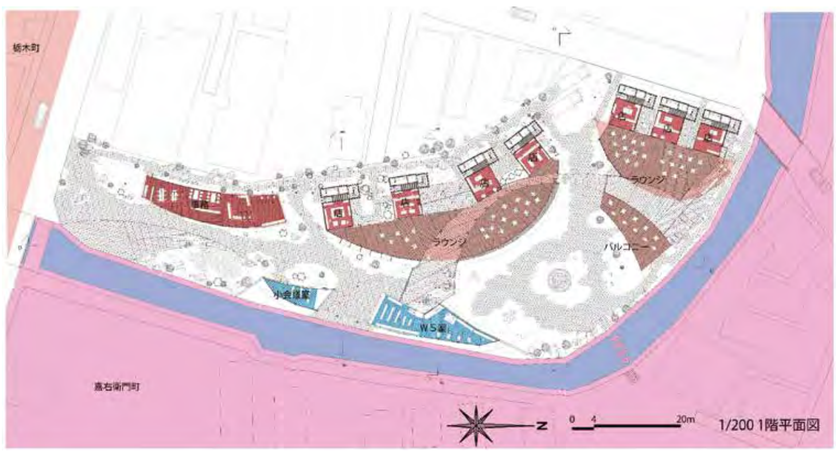
そこで今回、商い希望者のための仮の店であり観光地における住民の貴重な憩える空間であるとちぎ住民にとっての奥庭を設計する。

敷地　- 栃木市錦町の一角 / 栃木町・嘉右衛門町どちらにも肩入れしない場所 -

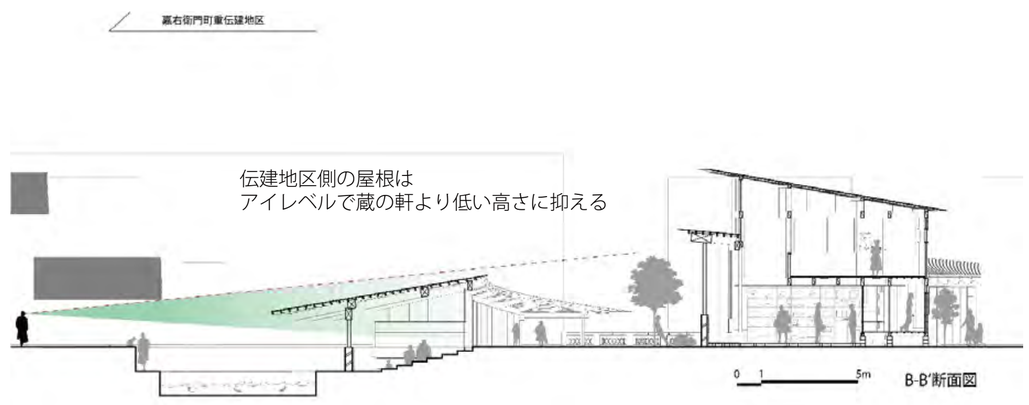


ダイアグラム

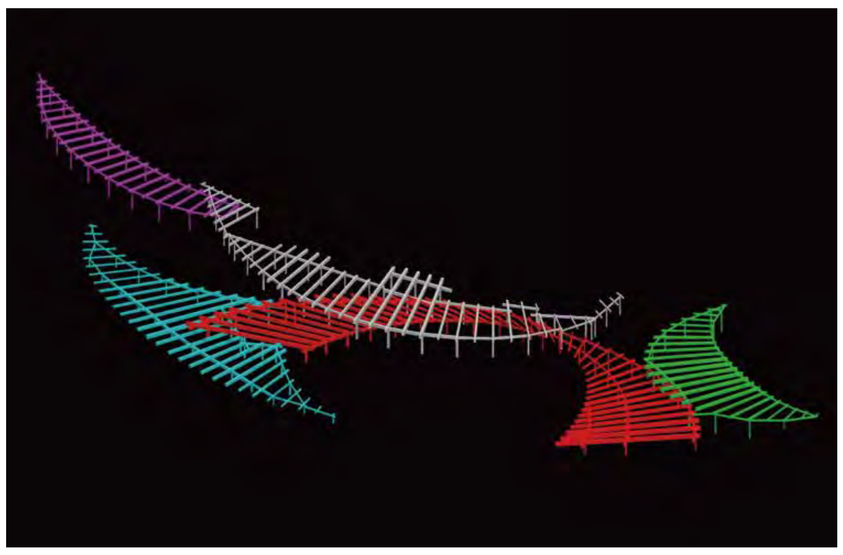
①機能配置　- 現地調査を元に地域の雰囲気に合わせ配置 -



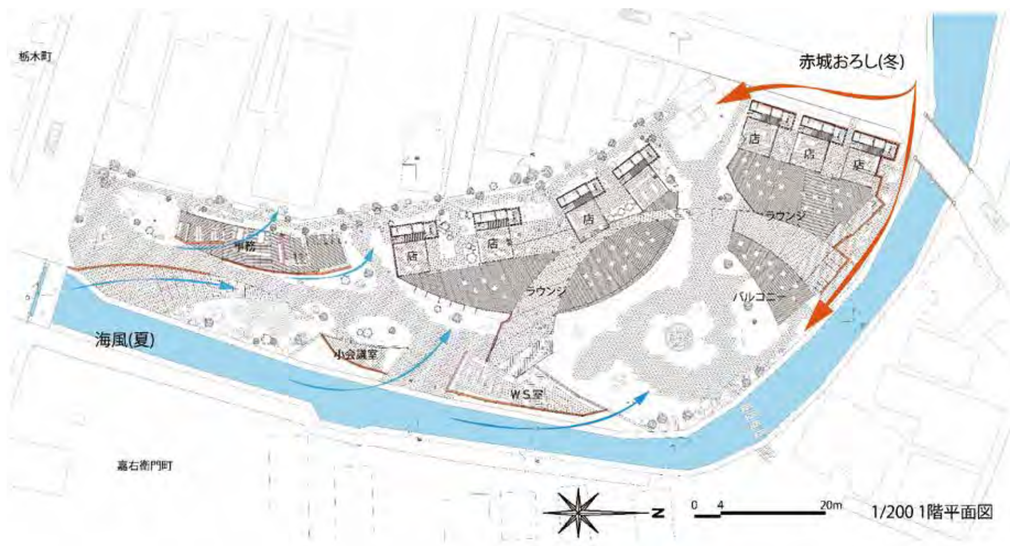
②屋根のデザイン　- 各機能を繋ぐ -



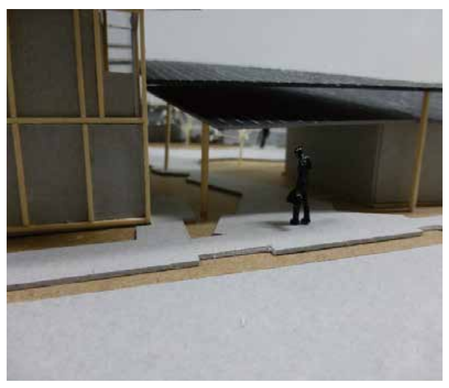
③構造デザイン　- 各々の屋根を独立した構造に -



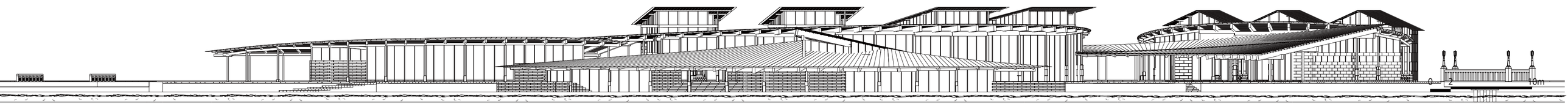
④壁デザイン　- 赤城おろしを防ぎつつも海風を引き入れる -

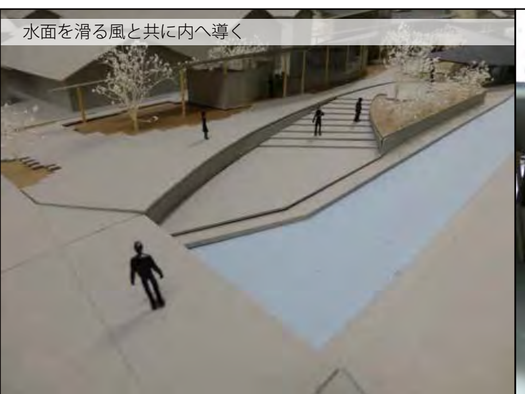


④ランドスケープ　- 動線を引きつつも安らげる空間を目指す -



東立面図




水面を滑る風と共に内へ導く

入り口で風の洗礼を受ける

中庭を背景に談笑する名家や栃木を訪れた人々

回廊沿いに並ぶ店

中庭に達する